The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	フィリピン語教育における英語の扱いをめぐる問題・試論
Author(s)	宮脇, 聡史
Citation	外国語教育のフロンティア. 2018, 1, p. 205-213
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69790
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

フィリピン語教育における英語の扱いをめぐる問題・試論

On the Treatment of English in the Education of Filipino Language

宮脇　聡史

要約

本報告は、まず、フィリピンにおける国語と英語の複雑な関係を概観し、日常会話、留学先での学習、現地資料や既存研究に基づく研究調査活動における、フィリピンの文脈における英語の特殊な重要性を確認している。その上で、フィリピン語を専門とするコースワークの中で必要と考えられる留意点と、過去数年に及ぶ報告者自身の教育実践について報告している。

キーワード：フィリピン語、英語、国語、公用語、タグリッシュ、言語選択

1. 問題の性質

外国語学部で教授される言語の一部は、英語を筆頭にフランス語、スペイン語を含め、グローバルに通用するものもあるが、大半は、筆者自身が教育に携わっているフィリピン語を含め、特定の国民国家の国語、ないし国民語とされている言語である。日本において、その国語と定められた日本語を教育言語として（従って日本語話者に対して）、こうした外国の国語を教授する際には、第1に、その言語のもつ国語としての位置づけを明らかにし、その特徴を踏まえた教育のあり方が期待されるであろう。その上で第2に、大学、及び学部の基本的な目的に照らして、そこにおける語学教育の目標と当該言語の関係を明らかにしながら、目的合理性の高いカリキュラム、及び教育実践が求められることになる。

筆者が2012年以降大阪大学外国語学部において6年近い教授経験を持つフィリピン語をこうした観点から見るとき、きわめて多くの考慮すべき、しかし実際の対応が必ずしも容易でない問題が浮かび上がる。そこでは、ただ純粋に「フィリピン語という一言語」を習得するように教育する、ということだけでは済まない問題が浮かび上がる。そしてその要のひとつが、公用語としてフィリピンの言語のあり方を語る際に不可欠であり、なおかつグローバル言語でもある英語をどう位置付けるか、という問題である。

a. 国語としてのフィリピン語、公用語としての英語、その交じり合いつつの発展

16世紀以降300余年に亘り、フィリピン諸島の北部、中部の主に低地はスペインの支配下に置かれ、キリスト教化が進められたが、その統治は、特に地方においてはカトリック

修道会を中心に、現地諸言語の整備とともに現地諸語によって進められた。植民者の言語スペイン語はこれらの言語に多大な影響をもたらしはしたものの、スペイン語自体の普及は中流・上流階級に限られた。その結果、19世紀末の独立戦争、その後のアメリカによる再植民地下の時代には、地方の主要言語であるイロカノ語、タガログ語、セブアノ語などが地域を超えたエリートの言語としてのスペイン語と並存し、国民統合に資する支配的な言語は不在であった。

20世紀前半のアメリカによる植民地政策は、公教育の整備による英語の普及を通じてこの課題に取り組んだ。他方でこれに対する反発も強く、首都マニラを中心に次第に普及度を高めつつあったタガログ語を軸に国語を確立させる、という主張も強まっていく。但し特にフィリピン中南部で広く普及していたセブアノ語圏には、タガログ語の国語化への抵抗と反発が強く、英語を共通語としつつ地方の言語を保持、促進する主張も根強いものとなっていった。これにより、公用語としての英語、国語を志向するタガログ語、セブアノ語、イロカノ語のような地方における広域共通語（リンガフランカ）の保持主張、そして残存する少数言語集団、という言語空間の4つの層が相互に影響しあいつつ形成されていった。「フィリピン語Filipino」はそうした中で、タガログ語を中軸としつつ、国民的な教育とコミュニケーションの歴史的確立の中で普及、理論化、整備、試行錯誤を積み重ねてきた、いまなお生成のただ中にある国語である。しかも、植民地時代に英語によって統治、法、教育、経済、科学、及びそれらと結びついた主流文化が形成されてきた歴史の上に、1946年の独立以降の、しかも親米国家として冷戦の文脈の中で高度にアメリカ的な特徴を意識的に保持するよう努めてきたフィリピンにおける英語のヘゲモニーは形成、確立、発展、維持されてきた。これとの緊張関係、あるいは棲み分けの模索の中で、国語の影響範囲の拡張は模索されてきた。

しかし、1986年の民主化以降の政治、経済、社会の変化の中で、国語は着実にその重要性を高めてきているとみられる。都市化及び海外出稼ぎに見られる人口移動の大幅な拡大、及び首都への人口集中、さらにマスメディア、インターネットや携帯電話の普及によるコミュニケーション全体の拡大によって、首都マニラを結節点とし、母語や地方のリンガフランカの通用する範囲を超えた国民空間の言語活動が飛躍的に拡大した。このことによって、そこで醸成されていったナショナリズムと併せて、英語とフィリピン語を適宜合わせた共有可能な言語流通が促進されてきている。

書店におけるフィリピン関連の書籍、さらにフィリピン語の書籍の扱いの変化はこうした傾向を傍証するものでもある。1993年に筆者が初めてフィリピンを訪問した際、書店にフィリピニアーナ（Filipiniana：フィリピン関連書籍）のセクションを見つけて大いに驚いたが、それ以降、このセクションの拡大、それ以外のセクションにおけるフィリピン関連書籍の増加、さらに別段フィリピニアーナ・セクションを設けない書店の増加など

が明らかにみられる。さらに、かつてはごく限られていた国語による人文社会諸学の着実な蓄積、さらに文学における国語やフィリピン諸語によって書かれた書物の出版の拡大の傾向も明らかである。またかつては英語のみで読まれることの多かったテレビのニュースも、今では一部の例外を除いて国語でなされている。テレビのドキュメンタリーでは、非タガログ地域においてもほとんどのインタビューがフィリピン語で行われ、多くの人々が十分流暢なフィリピン語で受け答えをしているのを見ることができるようになった。

しかし、国語の確立への流れは、英語の衰退を生んでいるとは言えないようである。むしろグローバル化や労働力の流動化の進展の中で、海外出稼ぎ、船員、外国人や外国企業向けのサービス業（外国語教室、観光、BPOビジネスなど）の需要の高まりはフィリピン人の英語力と直結しており、フィリピン国内におけるグローバル化の進む環境の中での英語の重要性はむしろ高まっているし、これに対応した英語への取り組みも進んでいるように見える。フィリピンのビジネス環境のこうした変化自体も、国際社会のフィリピンにおける英語に対する評価の高まりをよく表している。

併せて考えると、言ってみれば、フィリピンにおいては、国語と英語が使い分けられつつ交じり合い、共に濃度を高めている。その交じり合いのレベルは、以前から指摘されてきた「タグリッシュ Taglish」（タガログ語と英語の頻繁なコードスイッチを伴う共存状態）のある種の高度化であり、単語の自在な流用と混成語の創出と併せ、両方の言語を共に理解し、また個々に単独でもかなり理解できる状態を前提にしつつ、一定の法則性を暗黙の前提とはしながら、しかしかなり自在に交じり合う言語実践となっている。

b.「フィリピンの国民的な言語」を学ぶ際に不可欠となってきた「英語の位置づけ直し」

以上を踏まえるとき、特に「フィリピン語専攻」でのフィリピン語教育において、英語が独特の重要性を持つことは明らかである。但し、大学のカリキュラムや年限、教員の構成は限られているから、また大学の英語教育自体が果たす役割、そして入試における英語力条件を満たした学生が入学するという前提も踏まえて、ある程度絞った形で、フィリピン語専攻の専門語学の教育の一環として意味のある、英語を適宜取り入れた教育の確立が求められる。

これまでの概観を踏まえれば、雑駁に言って必要とされているのは、フォーマルなフィリピン語の理解、フォーマルな英語の理解、そしてフィリピン語と英語が交錯する様態とその実践の理解、となるであろう。そのうち、ふたつめについては基本的にフィリピン語専攻自身が担うのはあまり適切とは言えない。但し、フィリピン語専攻の過去の比較的優れた卒論の多くは、多量の英語資料、文献の読み解きに基づいていることからも、英語力がフィリピン語専攻における学習成果に資する重要性は極めて高い、という点は指摘すべきと考えるし、フィリピン語専攻所属の学生については、何らかの形でフォーマルな英語

力の強化に資するカリキュラム上の工夫（たとえば英語圏への留学や英語科目の履修に関する特別な仕組みなど）がなされることも望ましいのではないか、とも考える。

フォーマルなフィリピン語の理解については本稿の対象外ではあるが、一定の課題を覚える。現在のフィリピン語専攻の教育の標準をなしているのは大上正直教授による教材である。フィリピン大学大学院において国語標準化政策と密接にかかわる教員たちの下で訓練を受けた大上は、他方で日本におけるフィリピン語教育のための教材の未整備な状況を踏まえ、日本におけるフィリピン語教育のひとつの標準を打ち立てる努力を重ねてきた。その成果である『フィリピノ語文法入門』は今ではフィリピン語教育に必須の古典的名著である。他方で、その後実践の場におけるより口語的なフィリピン語の学習教材として記された『世界の言語　フィリピン語』は、丁寧な文法、語法の解説と極めて口語的なダイアログ事例、若者たちの中に見られる新しい言葉遣いの傾向などを踏まえた類例のない教材となっている。こうした教材を中核としてフィリピン語教育を進めることができることは極めて幸いなことである。同時に、筆者は授業準備のために主にDVDや音楽媒体、そしてインターネット上で視聴覚教材を探し続ける中で、フィリピン語の中にも存在する異なる文脈での語彙や表現の使い分けの傾向性、特に文学的あるいはフォーマルな場面と、会話の場面での言語全体の様態の相違という、学生たちが現地に赴いた場合に不可避の問題についてのカリキュラム上、教材上の課題は大きく残っているように思われる。これは専攻全体にとっての、中長期的な課題となるのではないかと考えている。

そして残るのは、英語と国語が交錯する場である。これは主に三つに分かれると考える。ひとつは英語メインのコミュニケーションだが、フィリピン特有の英語表現、略称、そしてフィリピン語語彙の混入が認められる場合である。ふたつ目はフィリピン語メインのコミュニケーションだが、主に英語の語彙が混入する場合である。そして第三には、英語とフィリピン語がほぼ対等なレベルで自由に行き来するようなコミュニケーションである。この三つは厳密に分かれるのではなく、また時に連続的に現れることもあるが、さしあたって、この三つのタイプを念頭に検討する。

以下の叙述は次のとおりである。先ず２．では、聞く、話す、読む、書く、という言語の基本的な機能ごとに、英語の位置を確認する。３．では国語と英語が、社会空間の中で、どのように使い分けられようとしているのかを検討する。４．では、大阪大学外国語学部フィリピン語専攻におけるフィリピン語教育の全体像を、英語を含めたカリキュラムとする必要性、という観点を念頭に再検討する。５．では、以上から明らかになった論点をまとめると共に、いくつかの提言をする。

2. フィリピン語学習者にとってのフィリピンにおける言語の機能と言語選択

先ず、外国人がフィリピンにおいて、「聞いて理解すること」「話して意思伝達すること」

「読んで理解すること」「書くこと」をめぐって直面する言語選択、特にフィリピン語と英語の選択に関する状況を素描する。

外国人がフィリピン語を理解したり、話そうとしたりすることへのフィリピン人の期待は全般的に低い。それは、フィリピン人の多くが、一定水準の英語を話せることと関連し、外国人に対して積極的に英語でコミュニケーションをとろうとする傾向に見られる。その結果、観光などで短期間フィリピンを訪れる多くの外国人は、フィリピンでは英語ができれば十分、という印象を与えることになる。

しかし、大阪大学の留学生も含め、一定期間の滞在経験の中で、多くの外国人が疎外感を経験することとなる。それは、フィリピン人の多くは英語のみで話すことにしんどさを覚え、表現したいことの一部を英語しか通じない相手には十分明らかにせず、近くにいるフィリピン人にフィリピン語でもらすような場面がよくみられるからである。また多少のフィリピン語が混じることでコミュニケーションの緊張感が著しく緩和し、より親しいコミュニケーションが築けることを経験する。フィリピン語既修者はここでフィリピン語を学んできたことの意味、さらに学んでいくことの必要性を体感し始めることが多い。

関係が親しくなるとフィリピン人の話し相手はフィリピン語をより頻繁に混ぜて来るから、聞いて理解するためにはフィリピン語の理解力が求められるが、英語との行き来がある程度可能なレベルで話されていれば、フィリピン語の基本的な理解力があれば相手の言うことがかなり理解できる、というのが私自身や周囲の研究者仲間、またフィリピン語専攻のフィリピン留学経験者の実感であると言える。それに対して、話す方は適宜フィリピン語が混じることで親しい雰囲気を醸し出すことができれば、あとはかなり英語で意思伝達することができる。ただ逆に、フィリピン語の会話的な表現に熟達すれば、やさしい英語の基本語を混ぜながら豊かなコミュニケーションの経験が可能になるし、そうした会話の中では相手の語ることも難しい英語が入り込むことはさほど多くはない。

これが議論や授業などになると一挙にレベルが上がることとなる。既に高等教育において英語による議論に慣れていることが期待されているフィリピンでは、英語で討論が可能なレベルが求められるが、特にフィリピンの大学に留学した大学生も、外国人でもあるということで、高度な英語で議論を展開し、文献（大半が英語になる）を読解し、レポートを書くことができることが期待される。他方で近年の傾向として、国語としてのフィリピン語によるフォーマルな議論、演説、著述が確立してきている。その結果、大学におけるディスカッションにおいては、場面や状況、表現上の工夫の中で、フォーマルなフィリピン語、カジュアルなフィリピン語、フィリピン語と英語のコードスイッチなど、英語とフィリピン語の間をダイナミックに行き交う議論が展開されることになる。近年、さらにスラングまで交じり合うような新世代の討論のあり方を活字化したような出版物も増えてきている。

フィリピン語学習の基本的な目標として、フィリピン語話者とのコミュニケーションに熟達することがあるとすれば、留学、現地滞在において成果を挙げることは一つの目標達成の形であろう。上記の素描を正しいとすれば、英語とフィリピン語を聴き話すことが程々にできると、周囲の人々とよい関係が築ける、ということが分かる。そのために必要なのは、「程々に通じるフィリピン語」であり、英語については高卒までに6年の英語教育を受けて、大学でも英語教育を受けている日本人大学生は、現地でよい人間関係を築くためには英語力についてさほど気にすることはない、ということが想定される。

問題は、大学における専門外国語の教育の目標水準がそこでよいか、ということである。もしフィリピンの大学で学ぶために学術的な英語を読解する必要があるとすれば、少なくともそこに挑めるよう学生を励ます必要がある。また特に会話におけるのと幾分質の異なるフォーマルなフィリピン語が必要とされ、またそのようなフィリピン語が文学のみならず、ポップソングの中にも溢れているとすれば、現地滞在の中で人々の生活文化を深く経験することが期待される外国語学部の学生が、少なくとも会話の世界と異なるフォーマルなフィリピン語の深さに関する一定の導入が、留学、現地滞在の前に提示されることが期待されるであろう。さらにそうした「深いフィリピン語」は「高度な英語」との対比の中で用いられることが多い。公用語としての英語の支配的な位置に拮抗しうる高度な文化表現として、あるいは英語によっては侵すべからざる聖域として提起される。だから本格的な学習や研究を目指してフィリピン語の深みを目指すとき、高度な英語力も求められることになる。

3. マスメディアにおける国語、英語の位置づけ

以上のように国語と英語の並存、使い分け、混在の問題は、伝達方法の違いの中で見ていくこともできるが、それと関連してどのような場でどのような言語の使われ方になるか、という点も重要である。この点に関して、特にマスメディアにおける言語選択を取り上げる。

フィリピンの主要紙はすべて英語である。フィリピン語の新聞はタブロイド紙であり、ある程度整ったものは大手紙の傘下にある。しかし、近年の新聞記事、特に最大手のPhilippine Daily Inquirerや第3位のPhilippine Starでは、フィリピン語で語られたものをそのまま引用し、英訳をかっこでつけることなどがみられるようになっている。さらに新聞ではないが、動画なども積極的に活用するオルタナティブなインターネットニュースメディアとして近年注目されているニュースサイトRapplerにはフィリピン語の引用と英語の訳、またタグリッシュの記事などが積極的に掲載されている。

ラジオは英語メディアもあるが各地方語が主流である。テレビはタグリッシュによるバラエティとややフォーマルなフィリピン語によるニュースが一般化してきた。特にかつて

は英語のみのニュースが少なからずあったのが、今ではほとんど見られなくなっている。とはいえ、ニュースのフィリピン語における英語の混成は一定程度見られる。

以上で確認されているのは、フィリピンのコミュニケーションにおける英語のプレゼンス、しかもフィリピン語の存在感が増す中でなお不可欠な、そしてフィリピン語の存在を前提とした英語の存在である。それはフィリピン語と使い分けられる面、フィリピン語と混ぜ合わせる面、両言語の用いられる場面や文脈の違いを生かして巧みに混ぜることで生み出される多彩な表現などである。フィリピンのコミュニケーションにおける英語は少なからず、フィリピン語の存在を前提とする文脈の中で位置づけがなされているから、そうした位置づけ方や、用いられた場合のニュアンスに注目した教育は、フィリピンにおける言語コミュニケーションに関する教育の内容として望ましいと考える。

4. 教育現場におけるフィリピン語と英語（大阪大学フィリピン語専攻の現状に照らして）

以上のフィリピンの言語コミュニケーションにおける英語の特有の位置を踏まえ、大阪大学外国語学部フィリピン語専攻のフィリピン語教育のプログラムの特徴、そしてその中での英語をめぐる課題を挙げる。

フィリピン語専攻のフィリピン語教育は、他の諸語専攻とほぼ同様に、1、2年次に通年必修5コマの基礎教育と、3、4年時の演習から成っている。中軸となるのがフィリピン語教育を専門とする大上正直教授の授業であり、既に触れた1、2年時に主に活用される、彼の手になる文法と語法の二つの教科書がその標準を示している。筆者が担当する1、2年生の科目はこれを踏まえつつ、非常勤教員やフィリピン人特任教員の教育内容、3、4年時の学生のニーズ、特に卒業論文に向けた備えを視野に入れて、語法の教科書を進めつつ、適宜全体カリキュラムの観点から補うべきと考えるものを加えてきた。特にフィリピン語専攻の教科内容を「フィリピン地域研究」と広めにとらえ、フィリピンをめぐる多分野の研究に触れる教科内容を取り入れるようになった。

そうした中で筆者がその一環として英語を何らかの形で組み入れる必要について検討し、試行錯誤し始めるようになったきっかけは、卒業論文の指導であった。フィリピン語専攻において、語学をテーマにした卒論は少なくないものの、やはり社会文化に関するテーマを設定する場合が多かった。ここで生じる問題は、ふたつであった。ひとつは現地調査をする場合に現地語能力の限界もあるが、英語に依拠することが多く、かなりの程度英語で進めることが可能なテーマが多いことが挙げられる。得意のフィリピン語を生かして積極的に現地調査を進めるケースは限られており、その場合でもかなりの程度英語でのコミュニケーションも積極的に取れることが重要となることに気付いた。もうひとつは資料調査において、大半がフォーマルな英語で書かれていることであり、英語文献や新聞記事などの分析において、フィリピン滞在の有無を問わず、英語圏への留学経験者など英語

により習熟した学生が有利に卒論の研究を進め、成果を挙げる様子を見てきた。

また、学生たちの留学における選択や留学先での授業の経験などのフィードバックも重要であった。ほとんどの学生が現地での英語学習をフィリピン語学習と並んで重視していたし、英語圏への留学組も多かった。さらに卒論との関連で言えば、留学先の在外フィリピン人に関する調査に関心を持つ学生も少なからず存在していることにも気づいた。

そうした中で、2015年度に、1、2年生の授業でフィリピン史の概論を英語で読む時間を設けたり、新聞記事を読む機会を持ったりするようになった。その中で単純な英語力の問題を超えて、フィリピンをめぐって問題となる歴史的、社会的、生態的、人文的な語彙や、フィリピンで頻繁に用いられる略称など、フィリピン地域研究上重要な語彙、またフィリピン語を用いる場合でも語彙として流用できるような英語の語彙の学習機会を設けることが望ましいのではないか、という感触を持つようになった。

2016年度には、3、4年生向けにフィリピン語と英語が頻繁にスイッチし、両方の語彙が交差するような最近の出版物を授業で取り上げ、語彙や言語の使い分けが生み出すニュアンスや表情、そしてこれらを理解するための、英語とフィリピン語の並行使用状況や各言語の持つ政治性などを検討した。ただ、問題はこうしたテキストの読解の教育上のゴールをどう定めるかであった。こういうものもある、という紹介のレベルを超えて、こうしたコミュニケーションのあり方を、より広いコミュニケーションのあり方の全体像と併せて理解して初めて十分な意味が明らかになると痛感した。

2017年度には、2年生の授業で、絵本、漫画、歌、ドキュメンタリーなど文学ジャンルの中でのフィリピン語の特徴の違いや英語の導入のされ方について、実際のテキストをできるだけ導入して学ぶ機会を設けるよう努めた。また3、4年生の授業ではあえて英語のニュース動画や新聞記事を、フィリピン語によるものと併せて授業で検討することで、卒業論文で活用される機会の多いマスメディアの資料を語学の演習の授業で取り上げる試みを行った。いずれも一方で実際の教材を活用する必要があるが、他方で散漫とならずにより大きな言語の用いられ方の理解につなげることのむずかしさがあると痛感している。

5. 提案：カリキュラムのゴールに照らした英語の適切な導入

他言語の教育でも同様であると思うが、フィリピン語専攻においても、フィリピン語自体の教育そのものがすでに相当不足していると痛感する。留学によって飛躍的に語学力を伸ばす学生たちを見ながら、日本国内で、しかも日本語でフィリピン語を地道に学ぶことの意義とその限界をあれこれ考え、悩むこともある。であれば、そこにさらに英語がどうのということ自体が不真面目に思える時期が長かった。

しかし、他専攻における、特にゼミの講読などについての話を伺い、また学生便覧に掲載している「専攻御到達度目標」を振り返ってみるにつれ、調査や資料読解における実践

的なコミュニケーション能力を涵養するための教育のあり方を真剣に考える必要を痛感するに至った。フィリピンの言語状況の中で、英語も含めた公的な言語の用いられ方への実践的な習熟は、極めて重要な教育上の目標ではないか、と今は考える。

これはもしかすると、従来の外国語学部における言語教育のあり方に照らして邪道の面もあるのかもしれないが、それでも、フィリピンの言語をめぐる現実と教育上のゴールに照らし、さらなる模索は不可避であると考える。

参考文献

大上正直

2003　『フィリピノ語文法入門（新装版）』 白水社。

2009　「第13章　国語の形成―多言語国家が抱える苦悩」『現代フィリピンを知るための61章（第2版）』 明石書店、72-75。

2009　「第14章　フィリピン語―基礎はタガログ語」『現代フィリピンを知るための61章（第2版）』 明石書店、76-80。

2017　「専攻語到達度目標」 大阪大学外国語学部 『2017　学生便覧』

大上正直、ジェニー吉沢

2012　『世界の言語　フィリピン語』 大阪大学出版会。

岡田泰平

2014　『「恩恵の論理」と植民地―アメリカ植民地期フィリピンの教育とその遺制』 法政大学出版局。

フィリピンの新聞・ニュースウェブサイト

Philippine Daily Inquirer

http://www.inquirer.net/

Philippine Star

http://www.philstar.com/

Manila Bulletin

http://mb.com.ph/

Rappler

https://www.rappler.com/nation